

八木多与王

團伊玖磨

八
五
夕
舟
王



圓
江
現
君

昭和五十四年七月二十日 第一刷発行

書名 八大多与里

定価 一〇〇〇円

著者 團 伊玖磨

発行者 藤田雄三

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

題字・地図 團 伊玖磨

装幀 熊谷博人

© 1979 by IKUMA DAN 0095-254673-0042

此處に四つの大きな島に一億一千万の人間が蠢く国がある。暖かく言えばエネルギーに満ち溢れた国、冷たく言えば万象種々雑多に押し合いへし合いの国。

その象徴のように喧騒を極める東京から南に三〇〇軒、本州沖を東流する黒潮の湯気の中に浮かんで八丈島がある。人口約一万人。四季緑と花を絶やさぬ平和な島である。

三〇〇軒。それは近いとも言えるし、遠いとも言える。全日空のタルボジェットYS11で羽田空港から僅かに五十分。東京——仙台、大阪——足摺岬の距離と言えば近い。然し、然し海上三〇〇軒、その間を時速七ノットで東流する「黒瀬川」のために、日本本土と八丈島は遠く隔てられて来た。島も通わぬ八丈ヶ島、その言葉は島に住む者にとっては時に、今も切実である。

僕の仕事場の近くの黒砂山くろすのうの頂上からも、島の西側に聳える八丈富士の山頂から

も、高性能の望遠鏡を使うと、冬の晴天に限って日本本土の富士山が見える。但し富士とは言つても、冬の濃紺の海面の上に、ほんの少し、頂上近くが雪を被つて見えるだけである。矢張り地球は円いのである。

島の緑の斜面に仕事場を建てて、そこで孤独な作業をするようになって十五年が経つた。島に居る時、僕の心は何時も本土の家族と、育ちつゝあつた、伸びつゝあつた子供への相聞の歌を歌つていた。そして、喧騒の本土を歩いている時は、僕の心は、何時も黒潮の湯気の中に浮かぶ緑の島、僕の愛する島に相聞の歌を歌つていた。

島に居て記した文章の中から、今、纏めて「八丈多与里」を編んだ。僕は、この自分の中年の日々の記録を、既に育つた僕の子供と、八丈島の優しい人達、そして島そのものの美しい風土に捧げたい。



秋だ。そう思つて、^{うろ}雲の浮かぶ高い空を見ていた。傍に立っている子供は、海の遠くを見ていて、何か考え事をしてゐるらしい。何だ彼だと忙しさに紛れて、こんなにゆつくりとした気持ちで空など眺めている事は久し振りの事だ。三年半前に、テレヴィジョンの僕の番組が始まる前には、僕はいつもこの崖の上に立つて、いつもこんなにゆつたりした気持ちで空を見、海を見、島の緑を見るのを日課にしていた。自作を指揮する仕事もあるにはあつたが、それとて一年のうち総計して二十回程、あとは、そのために上京する以外は、八丈島の家の机の上で、作曲と好きな文章を書いていれば良かつた。書き物に疲れた時は、島の南側の斜面にぼつんと建っている家から、二、三分歩いて、この崖の上に立つて深呼吸をした。無限に拡がる空、眼下の太平洋、遙か南に浮かぶ青々島、左右には海から突然に屹立した断崖が続き、その上には、八丈芒の群落を染め分けて、濃緑の楠と藪肉桂と海桐花^{トベラ}の林が、ところどころに畑を散見させながら巨大な斜面となつて、海拔七四〇米の八丈三原山に続いている。秋になると、いつもその上に空が高かつた。僕は、今日も高い空の

鯨雲を見ながら、その頃の、自由だった自分の日々を思い出していた。

突然、全く突然にテレヴィジョンの番組を受け持つようになって、僕の生活は一変した。放映は毎週だが、大きなオーケストラと共演する僕の番組は、二週間に一度、二本宛の録音、録画を、上野の文化会館と渋谷の公会堂で、公開番組として行う事になった。録画の前日は、一日中オーケストラの練習のために、小田急の生田いくたにある読売日本交響楽団の練習所で汗にまみれた訓練の指揮をせねばならず、その他に、番組の構成の打ち合わせ、選曲の打ち合わせ、ゲストの人選の打ち合わせ等が加わるために、毎週東京に出なければならなくなった。その上、困った事に、八丈島の上空は、時として気流の状態が悪化するために、飛行機の欠航が待ち構えていて、大切な公開録画当日や、百人以上の人員が待っているオーケストラのリハーサルの日などに、若しも行けぬような事があれば、責任問題である。

そういう重要な日は、当日、若しくは前日に東京に着くスケジュールでは危険なので、少なくとも前々日には島を発っていないと不安である。従って、島に居る日は益々ますます少なくなつて、僕の生活は、それ以来、全く一変してしまったのである。汗まみれになつて指揮をしている時、打ち合わせのために東京の街を走り廻っている時、僕は、島の空気を存分に吸いながら、あの青い空の下で、

黒潮の躍る太平洋を見下ろしながら、書き物をして暮らしていた日々を懐かしんだ。そして、その生活の中で書いた四番と五番の交響曲、沢山の歌、何冊かの随筆の本を思った。それは、懐かしむと言うよりは、もつともつと強烈な、恋歌のように、僕の心を締め上げる感情だった。

然し、極くたまにしか帰れぬ島に八丈がなつて、子供が学校に通うために借りている葉山の家で殆んど寝起きする生活になつてみると、八丈は、又別の意味を僕に持つようになった。極くたまに帰った時の島は、極くたまにしか逢えない恋人に似ていた。美しく、優しく、暖く、島は僕に微笑みかけ、僕は、東京で、人間相手に磨^すり減らした神経と、体力の衰えを、再び島で取り返しては、又、東京に出かけるのだった。それこそ、島での時間は、たまにしか逢えぬ恋人と逢っている時間に似ていた。島に居る限り、僕は、一分、一秒も大切にする。

僕の家から北側に少し歩いたところに、不思議な畑がある。八丈は、東京から丁度三〇〇軒南の、黒潮の中に浮かぶ島であるために、温度も内地よりは少々高いし、湿度が多い。その、高温多湿の氣候を恵みとして、この十年程は、観葉植物の栽培が、島の重要産業になつている。カナリー椰子、ゆすら椰子、ケンチャ椰子、フェニックス・ロベレニー等の椰子類から、ゴムの木、榕樹^{モミ}、バナナ、

美人蕉、電信蘭、人手葛、はぶ葛、筏、葛等々の各種の亜熱帯植物が、冬に吹きすさぶ西風さえ防いでやれば、戸外で育つ。

中でも、俗にフェニックスと呼ばれるフェニックス・ロベレニーは、その優美な姿と、小形でも鑑賞に耐えるところから、大都市の貸し鉢としての需要が多く、八丈島での栽培は、原産地の印度のアッサムを遙かに凌いで世界一と言われている。島の中を歩けば、そのフェニックス・ロベレニーの畑は到るところにあるのだが、僕の家近くの畑は、同じフェニックスを植えてあるにはあるのだが、少し様子が違うのである。

島に家を作った八年前（昭和三十八年）の頃は、散歩にその辺りを歩いても気付かなかつたのだが、一年程して、或る日、僕は、散歩の折りにその畑の不思議さに気付いた。その畑のフェニックスは、どういう訳か、葉は禿ちよろけに傷んで、幹も生彩無く、どう見ても病氣のように衰えたものだけが、三百本ばかり並んでいて、島のほかの畑の、一年中美事に輝いた葉を付け、幹も生々としてゐる勢の良いフェニックスとは全く異つた様相を呈しているのである。こゝだけが風当たりでもひどくて、それでフェニックスがこんなに傷むのかとも思つてみたが、家から続いた同じ斜面のこゝだけにそんなに風が当たる事も無さそうである。

家の庭に植えてある二十本程度のフェニックスは、よその畑と同じに頗る勢が良い。不思議に思っているうちに、丁度、家に遊びに来た近くの観葉植物の栽培者から、その畑の事を聞いて、成る程と感心した。その畑は、東京に貸鉢用に積み出されたフェニックスが、二年経つて、疲れ果て、枯れる寸前になったものを、再び島に送り返して、休養させ、青々と生き返させる、リハビリテーション用の畑だったのである。道理で、枯れそうな、全く生彩の無いフェニックスが、人間で言えば青い顔をして並んでいる訳なのであった。可哀そうなフェニックスは、貸鉢となつて、内地の喫茶店や、商店街や、ホテルや会社のロビー等を転々としているうちに、碌な日光も受けられずに、二年で半死半生になるのだそうである。そうになると、それを纏めて、再び東海汽船に積んで、八丈島の日光のもとに送り返す。島の高温多湿は、二年間で、半死半生だったフェニックスを、完全な緑の姿に甦えらせるのだそうで、そうすると、その樹は抜かれて、又再び貸鉢用に東京に積み出されて行くのだそうである。島の畑主と貸鉢業者の契約は、二年間病木を自分の畑に植えて甦えさせると、五本に一本が自分の物になるという契約で折り合っているという。

内地の喫茶店やレストランで、フェニックスの鉢植えは極く普通だが、その裏側に、こんな考えも及ばなかった絡繰^{からく}りが行われていた事を、僕は、フェニックスには一寸気の毒に感じながらも、

面白い事だと思った。もう二度三度と内地と島の間を往復しているフェニックスはざらですよ、とその植物業者は僕に教えて呉れた。

東京と往ったり帰ったりするようになってから、僕は、家の近くのそのリハビリテーションの畑の傍を通る度に、そこに植えられている、疲れ果てたフェニックスを見て、他人事では無い気がする時がある。早く緑に甦えつてお呉れ、必ず僕はそう思い、あれだ、あの木が僕なのだと、島と僕の関係を思うのである。

「何を考_へているんだね」

と僕は、傍で海の方を見ていた子供に訊いた。

「高校の入試の事」

子供は答えた。そして、

「もう、これから来年試験が終る迄は、島に来る事は出来無いし、それ迄島にお別れだから、この綺麗な景色をよく覚えて置こうと思ったんだ」

と言った。

「良い考えだと思ふ、あの水平線の上の青ヶ島の形、高い高いところに鯛雲を浮かべた空の青さ、三原山と八丈富士の緑、澄んだ海の色、そして、この甘い、透き徹った空気の味をよく覚えて置きなさい。これから半年の間、一所懸命に勉強を続けている時、疲れた時に、この景色はきつと君の頭の中にいつの間にか浮かんで、疲れを消して呉れると思うよ。大自然の美しさ、雄大さ、厳しさ、それは少しの誤魔化しも無いだけに、いつ迄も人を勇気付けるものだからね」

「今日は特に綺麗だね、パパちゃん」

「秋だもの」

「青ヶ島の上に夕焼けが始まった」

「君は、青ヶ島がここからの位遠いか知ってるか」

「六四、五杆でしょう」

「そう、良く知っているね、不思議な事にね、島の人は、青ヶ島が余りはつきりと見えると、翌日は雨だと言うんだよ、そして、少し霞んでいると、翌日は晴れなんだと言うんだよ。そして、割合にそれは当たるようだよ」

「へえ、でも、じゃ、明日は少し曇るかな。でも、船は出ますね」

「大丈夫だろう」

僕達は、丈成する八丈芒の群落の間の小径を辿つて家に戻つた。家ではママちゃんが夕食の支度に魚を煮ている匂いがした。斜面の一軒家に灯を点した。夕食の膳を親子で囲みながら、明日、船で一人で本土へ帰る子供と、ママちゃんは、お握りの数について相談していた。僕の家では、子供には、島の往き返りには船、それも三等しか使わせない。十三時間、波に揺られての船艙のごろ寝は辛かろうと思ひはするが、子供を飛行機に乗せるような贅沢は、子供の将来のために、心して戒めねばならない。子供には、心の贅沢はさせる。然し、物質的な贅沢はさせない。それは僕の考えである。

翌朝八時、船は、きらきらした秋の朝日の中に、八丈島底土接岸港を出港した。子供は、後部甲板からいつ迄も手を振つていた。僕達夫婦も、船が見えなくなる迄手を振つていた。

子供の目には、手を振っている僕達が見えなくなつたあと、随分長い間、緑の八丈島が美しく見えていた事だろうと思う。来年、高校の入試を終える迄、彼の心の中に生きる美しい緑の島が、いつ迄も、いつ迄も、見えていた事だろうと思う。

◇

子供が帰った後、二、三日家の中の片付け物をして、家内も本土へ帰って行つた。

書き物を続けている僕だけが残っている島の上を、さまざまな天候が通り過ぎて行つた。

晴れた日、島は光つた。

豪雨の日、何百のハイビスカスの紅は落ちた。

風の日、怒濤は島の断崖に押し寄せた。

雨と風が争っているような日、カナリー椰子の梢は狂つたように揺れ騒いだ。

そして、又、穏やかな晴れた日には、島が光つた。

さまざまな天候の繰り返しのうちに、何時の間にか太陽の眩しさが變つて来ていた。降り注いで

は島を緑に輝やかせる太陽の光の中に、耳を澄ますと、澄んだ鈴の音が聞こえるようになり、遙か

天空高くから降って来るその鈴の音が、昨日迄には無かつた涼しさを少し宛運ずっんで来るらしかった。

鈴の音は、日に日に高くなつて行く空から、毎日降って来るようになった。

たった一人で書き物をしている僕の窓近くを磯鷗いそとぎが斜めに横切り、南から本土に渡る途中の足
休めなのだろう。百舌もずが防風林の夜叉やし又五倍子ごふしの枝先で鳴きしきる今、秋は、本格的に島を占領した。

子供から手紙が来た。

パパちゃん、お元気ですか。一学期が始まって二ヶ月以上が経ちました。いよいよ高校の入試迄
三ヶ月しか無くなりました。勉強は今ラスト・ヘビーです。頑張っていますから安心して下さい。
パパちゃんの作曲と原稿の進み工合はどうですか、良いものを一日も早く仕上げて、又いつもの
ように、書いたものを抱えて葉山に帰って来て下さい。

パパちゃんは相変わらず、朝早く起きて、島の部屋の大きな机の上でぶこはんを食べる時のほかは、
書き物ばかりしておられる事でしよう。時々は散歩をして、運動不足にならないようにして下さい。
ママちゃんもこゝで、青いものを食べて下さいと言っています。

ママちゃんの咽喉のどの病気はだんだんに良い方に向かっているようです。この頃は、夏の頃と違っ
て、声もよく出るようになって来ました。

横浜の山手の模擬試験の結果を送って来ました。千五百人中の七十五番目に名前が出ました。まだまだ頑張らなければいけません。三十番以内には入って置きたいのです。数学と理科はもともと好きなのでまあまあのですが、問題は社会と国語なのです。英語はその中間ぐらいのところかな。今日から試験までの日数が百日目なので、部屋の壁に、毎日残りの日数を貼る事にしました。いいいよラスト・ヘビーです。

では又お手紙書きます。ママちゃんがよろしくつて。

父上様

紀彦

返事を書いた。

紀彦君

お手紙有り難う。今日は君の手紙が来たので良い日でした。鳥は晴れて、空が高く、丁度、君は今頃どうしているかと考えている時に、郵便屋さんの赤いバイクが入って来て、君の手紙を届けて

呉れました。

受験が迫つて、いよいよ頑張っているようですね。今が一番大切な時ですから、毎日を、いや、毎時、毎分を注意深く送つて下さい。

僕は、前に、君が中学の入試の勉強をしている頃は、未だ子供だった君達が苛烈な試験勉強をする事が気の毒にも感じられ、又、試験又試験の連続である現在の六・三・三・四制の学制を疑問に思っていました。きつとこれは世間の親が誰しも思う事でしょう。学制の問題は一寸別として、然し、その後僕の考えは變つて来て、子供達が厳しい試験を次々と潜り抜けて行かねばならない事を、寧ろ、試験として良い事だと思ふようになりました。

何故でしょうか。それはこういう理由からです。

君達がやがて出て行く社会では、誰でもが果てし無く続く試験の中を進んで行きます。人間の一生は、大きな、又、極く小さなもの迄を含めて、試験又試験の連続だと言つて良いのです。やがてはそういう毎日を送る大人になる君達が、今のうちから、試験に打ち勝つ精神力を、学力を、人間力を鍛えておく事は、必要な事でもあるし、良い事だと思ふのです。毎学期の試験にしても、入学試験にしても、それを、単に良い成績を取るためというだけの小さな目的のためではなく、一つ